

## 中級計量経済学 2024 練習問題 (1) 解答例

TA: 岡本優太<sup>1</sup>

### 1

#### (i)

$X, Y$  が連続変数の場合のみを考える。表記の簡単化のために、 $\int_{\mathbb{R}}$  を単に  $\int$  と書く。周辺密度関数の定義から、

$$f_X(x) = \int f(x, y) dy, \quad f_Y(y) = \int f(x, y) dx \quad (1.1)$$

となる。また、 $X$  を条件とする  $Y$  の条件付密度関数を  $f_{Y|X}(y|x)$  と書くと、これは

$$f_{Y|X}(y|x) = \frac{f(x, y)}{f_X(x)} \quad (1.2)$$

と定義される。

#### (ii)

これらを用いれば、

$$\begin{aligned} \mathbb{E}[\mathbb{E}[Y|X]] &= \int \mathbb{E}[Y|x] f_X(x) dx \\ &= \int \left\{ \int y f_{Y|X}(y|x) dy \right\} f_X(x) dx \\ &= \int \int y f(x, y) dy dx \\ &= \int y \left\{ \int f(x, y) dx \right\} dy \\ &= \int y f_Y(y) dy = \mathbb{E}[Y] \end{aligned}$$

と計算できる。ただし、3 つ目の等号で (1.2) を、5 つ目の等号で (1.1) を用いた。

#### (iii)

期待値の線形性より、左辺は

$$\begin{aligned} \mathbb{E}[\{X - \mathbb{E}[X]\}^2] &= \mathbb{E}[X^2 - 2X\mathbb{E}[X] + \mathbb{E}[X]^2] \\ &= \mathbb{E}[X^2] - 2\mathbb{E}[X]\mathbb{E}[X] + \mathbb{E}[X]^2 \\ &= \mathbb{E}[X^2] - \mathbb{E}[X]^2 \end{aligned}$$

と、右辺は

$$\mathbb{E}[X(X - \mathbb{E}[X])] = \mathbb{E}[X^2 - X\mathbb{E}[X]] = \mathbb{E}[X^2] - \mathbb{E}[X]^2$$

と変形できることよりわかる。

---

<sup>1</sup>京都大学大学院経済学研究科 D2. 〓 [okamoto.yuuta.57w@st.kyoto-u.ac.jp](mailto:okamoto.yuuta.57w@st.kyoto-u.ac.jp). 不備があった場合や質問がある場合はこちらまでメールしてください。

(iv)

上と同様に、左辺は

$$\begin{aligned}\mathbb{E}[\{X - \mathbb{E}[X]\} \{Y - \mathbb{E}[Y]\}] &= \mathbb{E}[XY - Y\mathbb{E}[X] - X\mathbb{E}[Y] + \mathbb{E}[X]\mathbb{E}[Y]] \\ &= \mathbb{E}[XY] - \mathbb{E}[X]\mathbb{E}[Y]\end{aligned}$$

と変形でき、

$$\begin{aligned}\mathbb{E}[X \{Y - \mathbb{E}[Y]\}] &= \mathbb{E}[XY] - \mathbb{E}[X]\mathbb{E}[Y], \\ \mathbb{E}[\{X - \mathbb{E}[X]\} Y] &= \mathbb{E}[XY] - \mathbb{E}[X]\mathbb{E}[Y]\end{aligned}$$

であることよりわかる。

(v)

標本平均の定義を用いて、

$$\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) = \sum_{i=1}^n X_i - n\bar{X} = n \left( \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n X_i \right) - n\bar{X} = n\bar{X} - n\bar{X} = 0.$$

(vi)

上の結果を用いると、

$$\begin{aligned}\frac{1}{n-1} \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2 &= \frac{1}{n-1} \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) X_i - \frac{1}{n-1} \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) \bar{X} \\ &= \frac{1}{n-1} \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) X_i - \frac{\bar{X}}{n-1} \underbrace{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})}_{=0} \\ &= \frac{1}{n-1} \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) X_i\end{aligned}$$

となり、示せる。

(vii)

上と同様のステップを踏めば示せる。

## 2

(i)

$\mathcal{L}(b_0, b_1) = \sum_{i=1}^n \{Y_i - b_0 - b_1 X_i\}^2$  とおく。最小二乗法により  $(\beta_0, \beta_1)$  を推定するので、

$$\min_{(b_0, b_1)} \mathcal{L}(b_0, b_1)$$

を考えればよい。目的関数  $\mathcal{L}$  の微分は

$$\begin{cases} \partial \mathcal{L} / \partial b_0 = \sum_{i=1}^n (Y_i - b_0 - b_1 X_i) \\ \partial \mathcal{L} / \partial b_1 = \sum_{i=1}^n (Y_i - b_0 - b_1 X_i) X_i \end{cases}$$

により与えられるので、一階の条件より、 $(\hat{\beta}_0, \hat{\beta}_1)$  は

$$\begin{cases} 0 = \sum_{i=1}^n (Y_i - \hat{\beta}_0 - \hat{\beta}_1 X_i) \\ 0 = \sum_{i=1}^n (Y_i - \hat{\beta}_0 - \hat{\beta}_1 X_i) X_i \end{cases} \quad (2.1)$$

を満たす。1 つ目の式から、 $\hat{\beta}_0 = \bar{Y} - \hat{\beta}_1 \bar{X}$ 、であり、これと 2 つ目の式から、

$$\begin{aligned} 0 &= \sum_{i=1}^n X_i Y_i - \hat{\beta}_0 \sum_{i=1}^n X_i - \hat{\beta}_1 \sum_{i=1}^n X_i^2 \\ &= \sum_{i=1}^n X_i Y_i - (\bar{Y} - \hat{\beta}_1 \bar{X}) \sum_{i=1}^n X_i - \hat{\beta}_1 \sum_{i=1}^n X_i^2 \\ &= \hat{\beta}_1 \left\{ \bar{X} \sum_{i=1}^n X_i - \sum_{i=1}^n X_i^2 \right\} + \sum_{i=1}^n X_i Y_i - \bar{Y} \sum_{i=1}^n X_i \\ &= -\hat{\beta}_1 \left\{ \sum_{i=1}^n X_i (X_i - \bar{X}) \right\} + \sum_{i=1}^n X_i (Y_i - \bar{Y}) \end{aligned}$$

とわかる。ここで、大問 1 の (vi) と (vii) で確認した等式を思い出すと、これは

$$\hat{\beta}_1 \left\{ \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2 \right\} = \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) (Y_i - \bar{Y})$$

と変形できるので、 $\hat{\beta}_1$  は、

$$\hat{\beta}_1 = \frac{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) (Y_i - \bar{Y})}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2} \quad (2.2)$$

と表される。

(ii)

$\bar{u} = \bar{Y} - \beta_0 - \beta_1 \bar{X}$  とする。上の  $\hat{\beta}_1$  の式 (2.2) より、

$$\begin{aligned} \hat{\beta}_1 &= \frac{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) \{(\beta_0 + \beta_1 X_i + u_i) - (\beta_0 + \beta_1 \bar{X} + \bar{u})\}}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2} \\ &= \frac{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) \{(\beta_1 (X_i - \bar{X}) + u_i - \bar{u})\}}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2} \\ &= \beta_1 + \frac{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) u_i}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2} - \frac{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) \bar{u}}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2} \\ &= \beta_1 + \frac{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) u_i}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2} \end{aligned} \quad (2.3)$$

を得る。なお、最後の等号は、(2.3) の第 3 項の分子が

$$\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) \bar{u} = \bar{u} (n\bar{X} - n\bar{X}) = 0$$

より第 3 項がゼロになることを用いた。よって、先の式を変形すれば、

$$\sqrt{n} (\hat{\beta}_1 - \beta_1) = \sqrt{n} \cdot \frac{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) u_i}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2} = \frac{(1/\sqrt{n}) \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) u_i}{(1/n) \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2} \quad (2.4)$$

とわかる。

(iii)

まず、(2.4) の分子について

$$\begin{aligned}
\frac{1}{\sqrt{n}} \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) u_i &= \frac{1}{\sqrt{n}} \sum_{i=1}^n \{(X_i - \mu_X) - (\bar{X} - \mu_X)\} u_i \\
&= \frac{1}{\sqrt{n}} \sum_{i=1}^n (X_i - \mu_X) u_i - \frac{1}{\sqrt{n}} \sum_{i=1}^n (\bar{X} - \mu_X) u_i \\
&= \frac{1}{\sqrt{n}} \sum_{i=1}^n (X_i - \mu_X) u_i - \sqrt{n} (\bar{X} - \mu_X) \cdot \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n u_i
\end{aligned}$$

と分解する。右辺第2項の第1要素  $\sqrt{n} (\bar{X} - \mu_X)$  は中心極限定理により正規分布に分布収束するため、bounded in probability であり、第2要素は大数の法則より  $\mathbb{E}[u_i]$  に確率収束するが、これは講義ノート2の「最小二乗法の性質を調べるための仮定」(i) よりゼロである。したがって、第2項はゼロに確率収束する。第1項については、中心極限定理により、 $\mathcal{N}(0, \mathbb{E}[(X_i - \mu_X)^2 u_i^2])$  に分布収束する。よってスラツキーの補題から、(2.4) の分子は  $\mathcal{N}(0, \mathbb{E}[(X_i - \mu_X)^2 u_i^2])$  に分布収束するとわかる。ここで、(2.4) の分母は  $\mathbb{V}[X_i]$  に確率収束するので、再度スラツキーの補題を用いれば、

$$\sqrt{n} (\hat{\beta}_1 - \beta_1) \rightarrow_d \mathcal{N}\left(0, \frac{\mathbb{E}[(X_i - \mu_X)^2 u_i^2]}{\mathbb{V}[X_i]^2}\right)$$

とわかる。

(iv)

$\hat{u}_i$  はその定義より  $\hat{u}_i = Y_i - \hat{\beta}_0 - \hat{\beta}_1 X_i$  なので、(2.1) に代入すれば結論を得る。

(v)

$Y_i - \bar{Y} = (\hat{Y}_i - \bar{Y}) + (Y_i - \hat{Y}_i)$  より、

$$\begin{aligned}
\sum_{i=1}^n (Y_i - \bar{Y})^2 &= \sum_{i=1}^n (\hat{Y}_i - \bar{Y})^2 + \sum_{i=1}^n (Y_i - \hat{Y}_i)^2 + 2 \sum_{i=1}^n (\hat{Y}_i - \bar{Y}) (Y_i - \hat{Y}_i) \\
&= \sum_{i=1}^n (\hat{Y}_i - \bar{Y})^2 + \sum_{i=1}^n \hat{u}_i^2 + 2 \sum_{i=1}^n (\hat{Y}_i - \bar{Y}) \hat{u}_i
\end{aligned}$$

だから、第3項がゼロだと言えればよい。ここで、(i) で求めた  $\hat{\beta}_0$  の公式を思い出すと、

$$\hat{Y}_i - \bar{Y} = \hat{\beta}_0 + \hat{\beta}_1 X_i - \bar{Y} = (\bar{Y} - \hat{\beta}_1 \bar{X}) + \hat{\beta}_1 X_i - \bar{Y} = \hat{\beta}_1 (X_i - \bar{X})$$

となり、

$$\sum_{i=1}^n (\hat{Y}_i - \bar{Y}) \hat{u}_i = \hat{\beta}_1 \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) \hat{u}_i$$

を得る。この右辺と (iv) の結果より、これはゼロである。

さて、 $R^2$  の定義は

$$R^2 = \frac{\sum_{i=1}^n (\hat{Y}_i - \bar{Y})^2}{\sum_{i=1}^n (Y_i - \bar{Y})^2}$$

であったが、これは明らかに非負である。一方で、先の結論より、

$$R^2 = 1 - \frac{\sum_{i=1}^n \hat{u}_i^2}{\sum_{i=1}^n (Y_i - \bar{Y})^2}.$$

第2項が非負だから、 $R^2 \leq 1$ を得る。以上より、 $0 \leq R^2 \leq 1$ 。

### 3

#### (i)

$\hat{\beta}_1^A$  は大問2の(i),(ii)と同様にして、

$$\hat{\beta}_1^A = \beta + \frac{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) \epsilon_i}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2} \quad (3.1)$$

がわかる。一方で、 $\hat{\beta}_1^B$  は次の最小化問題

$$\min_{b_1} \sum_{i=1}^n \{Y_i - b_1 X_i\}^2$$

の解だから、1階の条件より、

$$\hat{\beta}_1^B = \frac{\sum_{i=1}^n X_i Y_i}{\sum_{i=1}^n X_i^2}$$

を得る。これを变形すると

$$\hat{\beta}_1^B = \frac{\sum_{i=1}^n X_i (\beta X_i + \epsilon_i)}{\sum_{i=1}^n X_i^2} = \beta + \frac{\sum_{i=1}^n X_i \epsilon_i}{\sum_{i=1}^n X_i^2}. \quad (3.2)$$

ここで、大数の法則、および確率収束の性質を用いれば、(3.1)の第2項は

$$\begin{aligned} \frac{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) \epsilon_i}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2} &= \frac{n^{-1} \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) \epsilon_i}{n^{-1} \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2} \\ &= \frac{n^{-1} \sum_{i=1}^n X_i \epsilon_i - \bar{X} (n^{-1} \sum_{i=1}^n \epsilon_i)}{n^{-1} \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2} \\ &\rightarrow_p \frac{\mathbb{E}[X_i \epsilon_i] - \mathbb{E}[X_i] \mathbb{E}[\epsilon_i]}{\mathbb{V}[X_i]} = 0 \end{aligned}$$

とゼロに確率収束する。よって、 $\hat{\beta}_1^A$  は  $\beta$  に確率収束する。 $\hat{\beta}_1^B$  についても同様に

$$\frac{\sum_{i=1}^n X_i \epsilon_i}{\sum_{i=1}^n X_i^2} = \frac{n^{-1} \sum_{i=1}^n X_i \epsilon_i}{n^{-1} \sum_{i=1}^n X_i^2} \rightarrow_p \frac{0}{\mathbb{E}[X_i^2]} = 0$$

から、(3.2)と合わせて一致性が分かる。

#### (ii)

大問2(iii)と同様の議論から、

$$\sqrt{n} (\hat{\beta}_1^A - \beta) \rightarrow_d \mathcal{N} \left( 0, \frac{\mathbb{E}[(X_i - \mu_X)^2 \epsilon_i^2]}{\mathbb{V}[X_i]^2} \right),$$

および

$$\sqrt{n}(\hat{\beta}_1^B - \beta) \rightarrow_d \mathcal{N}\left(0, \frac{\mathbb{E}[X_i^2 \epsilon_i^2]}{\mathbb{E}[X_i^2]^2}\right)$$

を得る。

(iii)

漸近分散を比較する。 $\hat{\beta}_1^A, \hat{\beta}_1^B$  の漸近分散をそれぞれ  $\mathcal{V}_A, \mathcal{V}_B$  と書く。つまり、

$$\mathcal{V}_A = \frac{\mathbb{E}[(X_i - \mu_X)^2 \epsilon_i^2]}{\mathbb{V}[X_i]^2}, \quad \mathcal{V}_B = \frac{\mathbb{E}[X_i^2 \epsilon_i^2]}{\mathbb{E}[X_i^2]^2}.$$

ここで、以下の2つのケースを考える。

**例 1.**

均一分散の場合を考える。つまり  $\mathbb{E}[\epsilon_i^2 | X_i] = \mathbb{E}[\epsilon_i^2] = \sigma_\epsilon^2$  を仮定する。このとき、

$$\mathcal{V}_A = \sigma_\epsilon^2 \times \frac{\mathbb{V}[X_i]}{\mathbb{V}[X_i]^2} = \sigma_\epsilon^2 \times \frac{1}{\mathbb{V}[X_i]} = \sigma_\epsilon^2 \times \frac{1}{\mathbb{E}[X_i^2] - \mu_X^2}$$

であり、

$$\mathcal{V}_B = \sigma_\epsilon^2 \times \frac{1}{\mathbb{E}[X_i^2]}$$

だから  $\mathcal{V}_A \geq \mathcal{V}_B$  となる。

**例 2.**

$X_i \in \{-1, 1\}$ 、つまり、2通りの値しか取らないとする。 $\mathbb{P}[X_i = -1] = 1/4, \mathbb{P}[X_i = 1] = 3/4$  とする。誤差項は、 $\mathbb{E}[\epsilon_i^2 | X_i = -1] = 1/4, \mathbb{E}[\epsilon_i^2 | X_i = 1] = 5/4$  のような分散不均一性をもつとする。このとき、

$$\begin{aligned} \mu_X &= \mathbb{E}[X_i] = \frac{1}{4} \cdot (-1) + \frac{3}{4} \cdot 1 = \frac{1}{2}, \\ \mathbb{E}[X_i^2] &= \frac{1}{4} \cdot (-1)^2 + \frac{3}{4} \cdot 1^2 = 1, \\ \mathbb{E}[\epsilon_i^2] &= \mathbb{E}[\mathbb{E}[\epsilon_i^2 | X_i]] = \frac{1}{4} \cdot \frac{1}{4} + \frac{3}{4} \cdot \frac{5}{4} = 1, \\ \mathbb{E}[\epsilon_i^2 X_i] &= \mathbb{E}[X_i \mathbb{E}[\epsilon_i^2 | X_i]] = \frac{1}{4} \cdot (-1) \cdot \frac{1}{4} + \frac{3}{4} \cdot 1 \cdot \frac{5}{4} = \frac{7}{8}, \\ \mathbb{E}[\epsilon_i^2 X_i^2] &= \mathbb{E}[X_i^2 \mathbb{E}[\epsilon_i^2 | X_i]] = \frac{1}{4} \cdot (-1)^2 \cdot \frac{1}{4} + \frac{3}{4} \cdot 1^2 \cdot \frac{5}{4} = 1 \end{aligned}$$

となる。これらを用いて漸近分散を計算してみると、

$$\begin{aligned} \mathcal{V}_A &= \frac{\mathbb{E}[(X_i - \mu_X)^2 \epsilon_i^2]}{(\mathbb{V}[X_i])^2} = \frac{\mathbb{E}[X_i^2 \epsilon_i^2 - 2\mu_X X_i \epsilon_i^2 + \mu_X^2 \epsilon_i^2]}{(\mathbb{E}[X_i^2] - \mu_X^2)^2} = \frac{2}{3}, \\ \mathcal{V}_B &= \frac{\mathbb{E}[X_i^2 \epsilon_i^2]}{\mathbb{E}[X_i^2]^2} = 1. \end{aligned}$$

すなわち、 $\mathcal{V}_A < \mathcal{V}_B$ 。

したがって、**例 1** の場合のように  $\mathcal{V}_A \geq \mathcal{V}_B$  となる場合もあれば、**例 2** の場合のように  $\mathcal{V}_A < \mathcal{V}_B$  となることもある。すなわち、一般にいずれの推定量が望ましいかを決定することはできない。<sup>2</sup>

<sup>2</sup>この結果は簡単なシミュレーションでも確認できます。[このリンク](#)先にサンプルコードを置いておきます。

## 4

$\hat{\beta}_0$  と  $\hat{\beta}_1$  は、

$$\hat{\beta}_1 = \frac{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) (Y_i - \bar{Y})}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2},$$

$$\hat{\beta}_0 = \bar{Y} - \hat{\beta}_1 \bar{X}$$

であった。大問2の(ii)と同様にして、

$$\begin{aligned} \hat{\beta}_1 &= \frac{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) \{(\beta_1 (X_i - \bar{X}) + \beta_2 (Z_i - \bar{Z}) + \epsilon_i - \bar{\epsilon})\}}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2} \\ &= \beta_1 + \beta_2 \frac{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) (Z_i - \bar{Z})}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2} + \frac{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X}) \epsilon_i}{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2} \\ &\rightarrow_p \beta_1 + \beta_2 \frac{\sigma_{XZ}}{\sigma_X^2} + 0. \end{aligned}$$

これと、 $\mu_Y = \beta_0 + \beta_1 \mu_X + \beta_2 \mu_Z$  ( $\mu_Y$  は  $Y$  の期待値) を用いて、

$$\hat{\beta}_0 = \bar{Y} - \hat{\beta}_1 \bar{X} \rightarrow_p \mu_Y - \left( \beta_1 + \beta_2 \frac{\sigma_{XZ}}{\sigma_X^2} \right) \mu_X = \beta_0 + \beta_2 \left( \mu_Z - \frac{\sigma_{XZ}}{\sigma_X^2} \mu_X \right).$$

以上より、 $\hat{\beta}_0$  と  $\hat{\beta}_1$  の漸近バイアスは  $\beta_2(\mu_Z - (\sigma_{XZ}/\sigma_X^2)\mu_X)$  および  $\beta_2(\sigma_{XZ}/\sigma_X^2)$  である。これより、例えば、 $X$  と  $Z$  の相関 (つまり  $|\sigma_{XZ}|$ ) が強い場合や  $Z$  の  $Y$  へ与える影響 (つまり  $|\beta_2|$ ) が大きい場合に漸近バイアスが大きくなるかもしれない。

## 5

$\bar{D} = (1/n) \sum_{i=1}^n D_i$  とする。(2.2) より、

$$\hat{\beta}_1 = \frac{\sum_{i=1}^n (D_i - \bar{D}) (Y_i - \bar{Y})}{\sum_{i=1}^n (D_i - \bar{D})^2} = \frac{\sum_{i=1}^n (D_i - \bar{D}) Y_i}{\sum_{i=1}^n (D_i - \bar{D})^2}$$

である。ここで、 $D_i \in \{0, 1\}$  より、 $\sum_{i=1}^n D_i = n_1$ 、 $D_i^2 = D_i$  となることに注意すると、

$$\bar{D} = \frac{n_1}{n}, \quad \sum_{i=1}^n (D_i - \bar{D})^2 = \frac{n_1(n - n_1)}{n}$$

と計算できる。したがって、

$$\begin{aligned} \hat{\beta}_1 &= \frac{\sum_{i=1}^n (D_i - \bar{D}) Y_i}{\sum_{i=1}^n (D_i - \bar{D})^2} \\ &= \frac{n}{n_1(n - n_1)} \left( \sum_{i=1}^n D_i Y_i - \bar{D} \sum_{i=1}^n Y_i \right) \\ &= \frac{n}{n_1(n - n_1)} \left( \sum_{i=1}^{n_1} Y_i - n \bar{D} \bar{Y} \right) \\ &= \frac{n}{n - n_1} (\bar{Y}_1 - \bar{Y}) \\ &= \frac{n}{n - n_1} \left\{ \bar{Y}_1 - \left( \frac{n_1}{n} \bar{Y}_1 + \frac{n - n_1}{n} \bar{Y}_0 \right) \right\} \\ &= \bar{Y}_1 - \bar{Y}_0. \end{aligned}$$